

## 第1回気運醸成分科会における主な意見等

## (構成団体としての取組)

- 中間支援組織であるので、分科会での取組等を会員にフィードバックしながら、ともにボランティアの気運を高めていきたい。
- マッチングには、非常に課題がある。企業のプロボノで何か活動したいと思っても、うまくマッチングできる仕組みがなく、自分たちの知っている範囲に留まってしまう。その意味で、東京ボランティア・市民活動センターがおこなっている相談の20%が、企業というのは広く紹介したい。
- 月に1回ニュースを出している。気運醸成に関するイベント等を紹介していくということが可能

## (マッチング・コーディネート)

- 企業から社員のボランティアについて、多く問い合わせ等を受けるようになったが、受入れ側として、日常業務に追われ、なかなか企業側の要望に応えられない。人数指定のあるものや短期のボランティアを作っていくのは難しい。受入れ能力を如何に高めていくかが課題。
- マッチングには、非常に課題がある。企業のプロボノで何か活動したいと思っても、うまくマッチングできる仕組みがなく、自分たちの知っている範囲に留まってしまう(再掲)。
- さまざまな企業の活動をしたいという人たちを受けとめる受け皿が十分でない。受け手側がそのためのプログラムを作るためには大きなエネルギーがいるが、対応できていない。そこを解決していくことが気運を高めていくためには必要。しくみづくりを協議したい。
- ボランティアを送り出す側でも、コーディネートしてもらうことが重要
- 企業にとっては、どこにどういう人材を送り出したらいかがが難しい。

## (学生等)

- 学生をどう巻き込んでいくかが重要。単位化により授業の中に組み込んでいくなど、活動の機会を提供していくことを考えていく必要がある。
- 今いる学生は、2020年には学生ではない。ボランティア活動の経験や知識を身に着けたOB、OGをどう活用していくかが大切。

## (その他)

- 地域から、大きな企業とつながりを持つ機会はないので、東京ボランティア・市民活動センターを通して、企業とのつながりをもっている。
- ボランティアとしては、語学や通訳に関する活動で中心となっているが、得意なところを伸ばしていくことで、結果的に各団体の連携が進み、気運醸成に貢献していけるのではないかと。